カトリック高松教区報

２０１３年３月３日（第１５３号）
発行所　カトリック高松司教区　広報委員会
〒760-0074　高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659　FAX 087-833-1484
Email
教区：catholic-takamatsu@takamatsu.catholic.ne.jp
広報：tk-koho@mxi.netwave.or.jp
生涯養成：　yousei@takamatsu.catholic.ne.jp
WEB://www.takamatsu.catholic.ne.jp/

マザー・テレサの言葉
渇いている人に一ぱいの水を飲ませてあげるなら、それはイエス様に飲ませて差し上げることです。
これは小さな単純な教えです。
でも、良く考えてみるなら、それは、一番大切なことなのです。

実りある信仰年・教区設立50周年を

諏訪榮治郎司教

今年、高松教区は教区設立50周年を感謝のうちに迎えようとしています。また第2バチカン公会議から50年目にもあたり、世界の教会と共に「信仰年」を実りゆたかなものになるようにと歩もうとしております。

教区報の新年号で述べさせていただいたように、第2バチカン公会議は教会の本質、その使命と意義を教会内外に明確に示したのです。公会議に一貫して流れていた「霊性」は「対話の精神」であったことをも述べさせていただきました。

諏訪榮治郎司教

この対話の精神は「神の民」という聖書的な表現でなされています。教会とは「神の民」であり、見えない神の慈しみを現す「秘跡」であり、福音宣教のため神の「道具」となる、と。

公会議は教会の本質を様々な表現で示し、それに応えていった地方教会は50年の歩みにおいてその意味を次第に見いだしていったのです。このように公会議から導き出された「教会のあり方」を改めて確認し、そこに働く神の恵みに応えて歩もうとするのが「信仰年」であるといえるでしょう。

□□　□□

公会議から呼びかけ

それはちょうど高松教区の目標「教区の一致と再生」に向けての歩みと重なりあう課題でもあると言えます。それは「わたしの教会」から脱皮し「キリストの教会」へと向かって歩み続ける「旅する教会」の姿であるといえるでしょう。教会の歴史は改革の歴史であると言われています。「どんな教会になりたいのですか」という問いかけは、私たち

「心を一つにし　思いをひとつにして」

「信仰共同体」を養成する

”キリストの教会”歩むために

「旅する教会」への公会議からの呼びかけであったのではないでしょうか。

改めて「キリストの教会」とは何を意味するのでしょうか。パウロはこのことについてコリントの教会に手紙（コリントの教会への手紙）を書いたのです。たくさんの賜物をいただいていたコリント教会に、なぜパウロが手紙を書かねばならなかったのでしょうか。

Ⅰコリント書の冒頭に『兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストの名によってあなたがたに勧告します。皆、勝手なことを言わず、仲たがいせず、心を一つにし、思いを一つにして、固く結び合いなさい』とあります。この教会には分裂（派閥）があったようです。『あなたがたはめいめい、「わたしはパウロにつく」「わたしはアポロに」「わたしはケファに」「わたしはキリストに」などと言い合っているとのことです』と。原因は神から与えられた種々の賜物を「私の誇り」としたところにあったようです。

□□

キリストの体とは？

パウロはそれぞれがいただいた賜物をもって「キリストのからだ（教会）」になる事を教え諭しているのです。『あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。神は、教会の中にいろいろな人をお立てになりました。私たちは「キリストの体」であり、働きにはいろいろありますが、すべての場合にすべてのことをなさるのは同じ神です。一人一人に“霊”の働きが現れるのは、全体の益となるためです』（Ⅰコリ12章）とあります。これは「わたしの教会」からの脱皮を願う私たちへの大切なメッセージではないでしょうか。

私たちは洗礼によって全てが新たにされ「キリストの体・神の民」に接ぎ木されました（ロマ書11・17）。また堅信において聖霊の注ぎを受け「キリストの霊」に満たされ「キリストの使命」を身におびたのです。それは洗礼・堅信の秘跡において、「聖香油」の塗油によって表されました。それによって見えない神の慈しみがキリスト者によって世に表されるのです。「秘跡を生きる」ことになるのです。

教会はこの聖なる油を注がれる人に向かって次のように言うのです。『神の民に加えられたあなたは、神ご自身から救いの香油を注がれて、大祭司、預言者、王であるキリストに結ばれその使命に生きるものとなります。』（入信の儀式書）聖香油〔キリストの油〕を塗られたキリスト者は社会の中でそれぞれの遣わされた場においてキリストの祭司職（神と人々との仲介者）、預言職（指し示す者）、王職（仕える者）を生きる者となるのです。これによってキリスト者は共通（万人）祭司職と呼ばれます。

赦しの秘跡や病者の油の秘跡を受けるキリスト者は共通祭司として、自分のためだけではなく、多くの人々のために神の慈しみと赦しを受けていることを自覚せねばなりません。イエス・キリストのように神の民は自分のために生きるのではないのです。

□□

主任司祭から脱皮

教区の目標推進に向けて「協力宣教司牧」をより実りあるものにしていくために、奉仕的司祭職を担う者は、一国一城の主のような「主任司祭」のあり方から脱皮し（教会法では「主任司祭」と明記されていますが）、協力宣教司牧のために当教区では「担当司祭」という名称をあえて使わせて頂くことにします。それは宣教司牧チームにおいて互いに識別し支え合いながら、信仰共同体において分かち合い、「キリストの体」に奉仕する者であることを自覚したいと思うからです。

また同時に、信仰共同体が自分のためだけではなく、多くの人々の救いのために教会があることを思うとき、この共同体は限りなくキリストの愛へと成長していく必要があります。聖霊によって日々新たにされるための生涯養成は（医師が常に新しい医療を研鑽するように）不可欠であると考えます。

□□

養成プログラム提示

創世記の冒頭に『はじめに神は天と地を創られた』（1章1節）とあるのは、何億年前の過去のできごとを語っているのではなく、今も神は働き続けておられる現在進行形を意味します。歴史の主人公は神です。

この大地を生かし、人の生命の喜びに昨日も今日も明日も呼びかけ続けておられるのです。私たちは、創造の業に招かれ協力していくのです。そのために「どんな教会を目指しているのですか?」と常に問いかけられているのではないでしょうか?このことから、本年度は教区の目標に向けて中期ビジョン「信仰共同体」を取り上げ、信仰養成プログラムを企画いたします。養成プログラムの内容等は復活祭後、皆さまに提示させていただきたく思います。皆さまのご協力と熱意ある御参加を心よりお願い申し上げます。

信仰年そして教区設立50年にあたるこの年を、主の豊かな愛と祝福の中に生きることが出来ますように心よりお祈り申しあげます。

信仰年に寄せて③

宇和島教会担当司祭　田中正史

―あなたの信仰があなたを救った―

私たちはだれでも強い信仰をもちたいと思います。イエスの弟子たちも「私たちの信仰を増してください」（ルカ17・5）とイエスに願いました。だが実際のところは、イエスによってその信仰が褒められた弟子たちは皆無であり、むしろ彼らは「信仰の薄い者たち」（マタ8・26、17・20）と言われています。

しかし、福音書の中でイエスにその信仰を認められた人たちがいます。この人たちの信仰から私たちも学ぶことができるのではないでしょうか。

実にさまざまな人がイエスから次のような言葉をかけられています。

あなたの信仰があなたを救った。」これらの人々は、12年間出血を患っている女、悪霊に苦しめられている娘をもつ婦人、盲目の物乞い、イエスの足に香油を塗った罪深い女、重い皮膚病を患っている人たちです。彼らの信仰は明らかに信仰箇条や何らかの教義や教条に同意することではありませんが、信仰の原初的でありながら完全なかたちを表しているといえます。彼らに共通することが四つあります。

①自分自身の力によってはどうすることもできない病や罪を負っていて彼ら自身まったく無力な存在でした。

②彼らは自分たちがそのような状態に置かれていることは自分たちにとって決して「善きこと」でも「真なる状態」でもないことを知っており、世界をすべて善きものとしてお創りになった（創1・31）おん父が自分たちの苦難を望んでいるはずがなく、おん父は善と真理の源であるかぎりこれらに反する悪にかならず打ち勝つ力をもち、自分たちを苦しみから解放してくださるという強い確信がありました。

③また、自分たちの病や罪を癒し悪を克服するおん父の絶大なる力はおん子であるイエスを通して自分たちにもたらされるという確信をもっていました。

④その結果、イエスを通しておん父の善と真なる偉大なわざが彼らの上に実際に実現され、彼らは完全に癒されました。

イエスに信仰を認められた人々

聖パウロから学ぶ

これらの中で②のおん父の善と真なる力に対する確信は最も重要で、イエスは彼らの中にこの確信を見たからこそ彼らに対しておん父の救いの力を仲介することができました。

彼らの信仰の中ではおん子であるイエスを通しておん父との人格的な出会いが現実になっています。そして、その出会いと癒しにおいて三位一体の神の愛の働きが彼らの人生の中にいかんなく具現化されていることに私たちは注目する必要があります。

彼らはまったく無力であったがゆえにもはやこの世の中でおん父の力以外に頼れるものは何もありませんでしたが、逆に彼らが無力であったがゆえにおん父の特別な愛と憐れみの対象となり、おん父はイエスを通して彼らから純粋な信仰を引き出したのであると考えられます。それこそがおん父のみ心でありみ業であるからです（ヨハ6・29）。また、彼らが受けた癒しとゆるしはおん父の愛のしるしである聖霊を暗示するものであるといえるでしょう。

無力であることを悟りおん父に自らを委ねる人にこそおん父はおん子を通して聖霊において真の愛の力を示されます。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのです（Ⅱコリント12・9）。

はばたき

今年の冬は寒かった。老人にはつらい季節だった。世は安倍政権になり、現状から脱し何とか『変わりたい』、とのワラをもつかむ思いが株高、円安に現れている。

この季節、教会は四旬節に入った。キリストの受難と十字架の死を体感した後、大きな喜びのうちに復活の栄光を迎え、神を讃える。神に救われた私たちの信仰が燃え立つときだ。

今年の指針となる四旬節司教教書が出された。諏訪司教は教区の歩むビジョン（夢）を提示する。今年の課題として、『信仰共同体』の養成に取り組みたいと述べる。聖霊に導かれ、信徒一人ひとりではなく、みんなで向き合って語り合い、祈り、手をつなぐ。小教区ひとつひとつではなく、ブロックとしての〝聖なる輪〟になって働く。そんなイメージが浮かぶ。

教区設立五十周年を迎え、『新しい福音宣教』へ進もうと司教は呼びかける。『新しい』という言葉に司教の強い思いが込められる。現状からの脱皮、教区の再生へ。生き生きとした信仰共同体から醸成されたエネルギーが、教会の衰退現象を乗り越えて『新しい福音宣教』へ向かう。

その実現のためには、司教と心を一つにする教区の全司祭の働き、そして司教の意思を的確に、そして迅速に教区民に伝える教区事務局の気配りのある働きが必要だろう。そして信徒への養成プログラムも提示された。

教区設立五十周年を振り返りながら、新たな一歩を踏み出そう。

２０１３年 高松教区辞令

司教教書の趣旨にともない教区内司祭人事を以下のとおり通達いたします。このたびの司祭派遣は協力宣教司牧態勢のため、司祭は地区・ブロックへの派遣といたします。

小教区を越えて地区・ブロック内でチームとして互いに協力し支え合うことから「小教区担当司祭」として任命させていただきます。職務的には従来どおりの主任司祭ではあります。

皆さまのご理解とご協力を心よりお願い申しあげます。

教区内異動される方や、本教区を出られる方にはこれまでのお働きに対して心から感謝申し上げます。

＊（　）内は前任地

本部事務局

本部事務局長・西川康廣助祭
〃　　補佐・岩﨑　武師
〃　　次長・多田　洋氏
教区会計担当・村上康助師
教区会計実務・井川美佳氏
司教秘書　・「後任空白」　（Sr. 中島俊枝〔修道会移動により退職〕）
教区広報担当・谷口広海助祭
司教館管理者・岩﨑　武師

香川地区

地区長：松永洋司師

・東讃ブロック
番町教会　担当司祭・松永洋司師
桜町教会　担当司祭・レナト・フィリッピニ師〔ブロック長〕
三本松教会　担当司祭・村上康助師〔司教総代理〕
小豆島教会　担当司祭・デシデリオ・カンバラ師
地区協力司祭・岩﨑　武師（南予ブロック）

・西讃ブロック
坂出教会　担当司祭・ホルヘ・ソーザ師（地区協力司祭）
丸亀教会　担当司祭・フェルナンド・マヨラル師〔ブロック長〕
善通寺教会　担当司祭・ネルソン・ウィリアム師
観音寺教会　担当司祭・マンソ・クレメンシオ師
池田教会　担当司祭・ホルヘ・ソーザ師

徳島地区

地区長：乾　盛夫師
鳴門教会　担当司祭・乾　盛夫師
徳島教会　担当司祭・林　和則師
阿南教会　担当司祭・シルバー・ベルトラム師
鳴門教会在住・Br. 八木信彦〔教区青少年宣教司牧担当〕

愛媛地区

地区長：ファン　マヌエル・ゴンサロ師

・東予ブロック
新居浜教会　担当司祭・土屋和彦師（西讃ブロック）
伊予三島教会　担当司祭・土屋和彦師
西条教会　担当司祭・稲毛利之師〔ブロック長〕
今治教会　担当司祭・ドミニコ会司祭［暫定］
東ティモール・サンティアゴ・サイズ師
海外研修・ユ ペドロ師　（東予ブロック）
大阪教区・パウロ セコ師（東予ブロック）

・中予ブロック
道後教会　担当司祭・川上栄治師〔ブロック長〕
松山教会　担当司祭・ルイス・グティエレス師
郡中教会　担当司祭・ハビエル・レチョン師

・南予ブロック
八幡浜教会　担当司祭・ドミニコ会司祭［暫定］

宇和島教会　担当司祭・田中正史師〔ブロック長〕

高知地区

地区長：イルダヤラージ・アントニサミー師
中島町教会、安芸教会　担当司祭・イルダヤラージ・アントニサミー師
江の口教会、赤岡教会　担当司祭・ヒラン・インディカ師（地区協力司祭）
中村教会　担当司祭・ブルゴアン・レモン師
地区協力司祭・硫黄隆二師

２０１２年１０月から始まった「信仰年」は第２バチカン公会議の開会50周年を記念して開催されているものです。そこで、これから3回シリーズで東京教区報「東京教区ニュース」に掲載された記事を紹介させて頂き、高松教区民も共に第２バチカン公会議の意義と成果、そして共に歩むべき方向性を探っていく材料になれば幸いです。それでは「信仰年」が記念している「中身」について見ていきましょう。

第２バチカン公会議って何ですか（上）

めったに開かれない

そもそも第２バチカン公会議って何でしょうか。よく聞くけれど、今さらそれが何なのか聞けない、という人も実は多いかもしれません。「第２」ということは「第１」があるのか？「公会議」ってなんなの？等々、まずはそんな素朴な疑問を解決しておきましょう。

公会議というのは、カトリック教会の指導者である司教たちが一堂に会して、教会にとって重要なことを話し合い、決定する会議のことです。ただし、これはめったに開かれるものではなく、教会にとって危急存亡のときに緊急に招集されるものです。どのくらい「めったに開かれない」かというと、第２バチカン公会議が閉会した１９６５年（ちなみに開会は62年）から今日までの約半世紀、公会議は開かれていませんし、またその前の公会議に当たる第１バチカン公会議は１８６９年からの開催、つまり19世紀です。その前のトレント公会議になると、なんと16世紀の出来事。つまりは１世紀に１度も開かれない、重大な事件なのです。

３千人の司教が集う

先ほど、「危急存亡のときに開かれる」と言いましたが、トレント、第１バチカン両公会議はまさにそのようなものだったのに対して、第２バチカン公会議は少し違いました。以前の公会議のように脅威と戦うためでなく、むしろ現代社会でどのようにしたら信仰を

教会に新しい息吹き

よりよく表し、よりよく伝えられるかを考え直す、いわば「ポジティブ」な会議でした。

世界中の３千人近い司教たちは、62年の開会から65年の閉会まで、国会のように1年に1度、数カ月程度開かれる「会期」に出席するためバチカンに集まり、話し合いを持ちました。

そこで決められたさまざまなことは、教会の公式の教え・方針として16の文書にまとめられ、公布されたのです。

この決定が私たち信者も含め、教会全体に大きな変化をもたらしたので、第２バチカン公会議は、ただ単に公会議が珍しい出来事だからという理由だけでなく、非常に重大な転換点として今日まで受け止められてきたのです。

日本語のミサや典礼

わかりやすい変化をいくつかあげると、たとえば、それまで全世界どこへ行ってもラテン語であげられていたミサが、それぞれの国の言葉で行われるようになったり（つまり日本語のミサや典礼聖歌の歴史はまだ半世紀もないのです！）、それまでは批判・断罪するなどしかしなかった、他のキリスト教会や他の宗教の価値を認め、対話する姿勢に転じたり、また以前は「教会」というと、教会の指導者や組織に強調点がおかれていたのに対し、第２バチカンでは、「キリストの体」として、洗礼を受けたすべての人で構成する教会、という神学的イメージが回復されたり、といったことです。

ヨハネ23世が劇的決断

公会議開会後、すぐに明らかになってきたのは、２千人からなる司教たちの中に、２つの傾向があることでした。ひとつは教皇庁の高位聖職者たちを中心とする動きで、基本的には準備委員会が用意した討議資料をそのまま承認して、公会議を終えようと考えていました。

もうひとつは、さまざまな国から来た司教たちの動きで、この公会議を機に、トレント公会議（16世紀）以来続いてきた硬直化した（原則論で人間に冷たい！）神学や教義を乗り越え、新しい息吹を教会に吹き込ませようと考えていました。

この２つの動きの対立が明らかになったのは、前回紹介した典礼の話し合いの後に提出された、『啓示の源泉について』という文書の討議においてでした。教皇庁が用意したこの文書は司教たちから厳しく批判されたばかりか、教皇庁自体の新設部門である「キリスト教一致推進事務局」からも不十分と指摘され、対立が決定的になりました。そして文書の討議を続けるかどうか、投票が行われますが、これは文書の運命のみならず、この公会議が従来の路線、つまり教会を義務や服従という面からばかり考え、また他のキリスト教派や宗教、世俗社会に対して対決姿勢を取るという路線か、それとも方向転換して新しい姿勢を打ち出すのか、その意思表示となる象徴的な意味を持っていました。投票の結果、文書の廃案に必要な３分の２には届かなかったものの、大多数が廃案を支持しました。しかし３分の２には足りなかったので、討議続行となり、議場は無力感に包まれました。しかしその時、公会議の意志を見て取った教皇ヨハネ23世は、劇的な行動に出ます。ルールを飛び越えてこの文書を撤回し、また準備委員会を改編して新しい体制のもとで執筆し直すことを命じたのです。教皇が明白に公会議の新しい流れに肩入れした、決定的瞬間でした。

「教会とは」を問い直す

教皇庁は、教義上の問題をまんべんなくカバーするために、おびただしい数の草案を準備していました。しかも、それが『啓示の源泉について』で明らかになったように、「使えない」ものだったので、出席者たちはその多数の草案に埋もれながら、討議にどれだけ時間がかかるのか、どこから手をつければいいのか、途方に暮れていました。

第１会期が終わるころ、ベルギーのスーネンス枢機卿が教皇と事前に打ち合わせて演説に立ち、次のような提案をしました。公会議はひとつの中心的なテーマを掲げたらどうだろうか。それは「キリストの教会、世の光」というもので、これはまず、教会が何であるかということを内向きに問い直すことであり、次に世の光として、外に向かって世界との関係を示すこと。換言すれば、これは３つの対話、つまり教会それ自身との対話、他のキリスト教会との対話、そしてこの世界との対話に入ることを意味する。この提言は大きな拍手で迎えられ、あれやこれやの細かい問題に注意を割（さ）かれていた公会議に明確な方向性を与えるとともに、公会議自体の性格を決定づけました。教会というものをもう1度根本から考え直すこと、そしてそれはケンカ別れしてしまった他のキリスト教派抜きには考えられないこと、またそれまでは批判・攻撃・拒絶の対象でしかなかった現代世界に向かって心を開き、その中にいる教会という視点で考えること、それがこの公会議の、そして公会議後のカトリック教会の、根本的な姿勢となったのです。

世古　淳

◇世古淳（せこきよし）氏
真生会館研究員、同機関誌「Ｖａｉｔａｌ」編集長。国際基督教大学（教養学士）卒業後、アメリカ、イタリアで学びローマ教皇庁立聖トマス・アクイナス大学より、神学教授免許、神学博士（エキュメニカル神学）取得。２００７年より現職

信仰年によせて
多くの交わりに感謝する日々

10年前、一人娘の闘病のため東京から沖縄へ移り住みましが、３年後、娘は亡くなりました。無信仰の私は、どこでどうやって弔えばよいのか途方に暮れていました。

この時私を助けてくれたのは敬虔なクリスチャンの友人でした。さぞ大変だったと思うのですが、沖縄市にあるカトリック教会と交渉して頂き、無事に葬儀を終えることができました。その後の私は、生きる気力もなく、ただただ涙にくれる毎日でした。

娘の死から８ヶ月後、今度は私を支え続けてくれた友人の息子さんが亡くなりました。私はその友人がいる愛媛に駆けつけました。友人夫妻は深い悲しみの中にありました。でも何か違うんです。二人には現実を受け止める強い力と絆がありました。「亡くなったあの子たちは今はとてもいいところにいるんだよ。私たちもいつかそこに行ってまた一緒になれるんだよ」というのです。

私は半信半疑でしたが、そこに希望を託しながらロザリオの祈りを唱えていると不思議と心が落ち着きます。祈りが私を救ってくれるかもしれない。神様を信じてみたいと思いました。

娘の七年目の追悼の前日、私は洗礼を受けました。洗礼名は娘の誕生日、10月1日の聖人、24歳で亡くなった小さき花のテレジアです。

黒島ちゑ子さん前列右から２番

現在、私は友人に誘われ、児童デイサービス〈カサ・ヨハネ〉で働いています。障害をもつ子供たちやその家族を少しでもサポートできればと思っています。

変わらない友情に支えられ、天国の娘に「お母さん、がんばって」と背中を押されながら、再び娘に会える日まで、生涯現役で頑張りたいと思っています。

宇和島教会　黒島ちゑ子

ひと
財務担当や雑事コツコツこなす

赤岡教会　藤原兼一さん（78歳）

藤原兼一さんは、南満州で誕生され、終戦後に秋田へ引き揚げられました。17歳からは10年近く、秋田聖園病院での闘病生活となり、左肺全摘手術も受けられたと伺っています。ご苦労の多かった人生ではなかったかと推測いたしますが、実に穏やかで、控えめな方です。

平成6年に新潟聖園病院を定年退職後、高知にUターンされ、パーキンソン病の叔母様の介護をされていました。その叔母様も、平成12年11月に亡くなられたそうです。

現在は、赤岡教会の財務担当者としてばかりでなく、裏方の煩雑な仕事をコツコツとこなして下さっています。会計初心者の私の質問には、毎度丁寧に答えて下さり、心から感謝しております。

毎年イースターには、絵の上手な奥様が描かれた卵の入ったプレゼントを、皆の為に準備して下さいます。

このように、ご夫婦揃って赤岡教会の為に、惜しみなく力を注いで下さっております。

今後共、健康に留意され、ご夫婦で頑張って下さい。

安芸教会・山口　幹

神学生便り
全ての出来事は信仰の恵・糧

神学課1年　高山徹

いつもお祈りとご支援をありがとうございます。お陰様で、早くも入学から1年が過ぎようとしております。

期待と緊張の両方を抱いて上京したのが昨日のことのようです。恩師の「全ての出来事は信仰の恵み・糧である」という言葉を想い起こします。良い時も良くない時も、いつも「その時」を味わいたいと思っております。

振り返って見ますと、日々様々なことをこなす毎日でした。特に2学期中は、神学院祭という大行事を控えていたので、神学院一丸となってそれに取り組んでいました。時々、ぶつかり合う場面もありました。そのような場面にも意味があると感じ始めた時、私は逆に、このメンバーと一緒に歩みたいと思うようになりました。

神学院祭は成功の内に終わり、皆で喜び合いました。神学院祭の中で、私は主に典礼関係の部所に属し、またケーキ販売や、有志のダンスグループにも参加しました。（某K-Popグループの真似です！）

来年度も養成担当者のご指導のもと、仲間と共に歩んで参ります。大きなチャレンジの年になりそうです。皆で祈り、学び、働きながら神学院共同体をつくる中で、日々頂く恵みを全身全霊で受け取りたいと思います。未熟な私ですが、どんな時も主に信頼し大切に歩んでいけますようお祈り下さい。また休暇中、司牧実習でお会いする際には宜しくお願い致します。

昨年は、主として今治、新居浜、伊予三島の三教会及び幼稚園の皆様にお世話になりました。皆様との交わりの中で、沢山の糧を頂いております！

高山徹神学生　中段左から３番目

必要な糧となった典礼講習会
ミサは「キリストの行為」神への賛美と感謝の祈り」

私たちカトリック信者は、毎週日曜日朝（または土曜日夕）、主日のミサに参加します。教会に信徒が集まって祝うもっとも重要な祭儀でしょう。日頃の自分を振り返ってみると、忙しさの中、ミサの深い意味も理解することなく、ただ形式的にミサに与っているように思います。その為、今回の典礼講習会は私にとってとても豊かな糧となり、第2バチカン公会議後のミサのことを学ぶ絶好の機会となりました。

私は、ミサ直前の信徒方が御聖堂に入ってくる様子を見るとき、いつもバレエ“くるみ割り人形”の第１幕初め、クリスマスイブの夜、少女クララの家でのクリスマス・パーティにお客様が次々と到着する場面を思い出します。ゆっくりとした足取りの御婦人・紳士方、再会を喜びあう人々、子どもたちを急かせながら席に着く親子連れ等々。

ミサは「キリストの行為」であり、同時に「神の民の行為」であると説明されています。会衆が集まるところに復活されたキリストがおいでになり、その代理として司式する司祭と奉仕者が祭壇へ向かい、ミサが始まるというこのことの中に、「キリストの行為」であり、また「神の民の行為」であるというミサの基本形が表現されています。

「ミサのために集う」こと自体が、この集会の中に救いの業を現在化されるキリストを招くための基本的な奉仕であり、キリストと共に神の民全体が、父である神にささげる賛美と感謝の祈りであると書かれています。

このことから、できる限りミサに遅れないようにする心構えが必要かもしれません。そして、落ち着いて「回心の祈り」を唱えることが、感謝の祭儀をふさわしく行うために必要だと分かります。

熱心に聞き入る信徒たち

この祈りの中で、兄弟の皆さんに告白します、と横の繋がりが強調されます。またレナト神父様はその告白の中で、善をするべき機会があったのに見逃してしまった“怠り”の罪についてなど、自分にしてほしいことは人にしましょう。たくさん良いことをしていきましょう。と、話されました。

ミサに与るにあたって、このように一語一語を理解するための心の準備が必要です。ミサ1分前に着席するのではなく静かな沈黙の時を持ちつつ、祈りの内にイエス様と対話を始めたいものです。この日のミサには、外国籍信徒を含め約１００人が参加しました。私にはイエス様が終始微笑まれているように思われました。

徳島地区議長・桑原稔実

若い力
四国の地で続く「若者と聖書」講座
多彩な講師陣　受洗決意した青年も

２００６年から高松教区内で開かれてきた『若者と聖書』講座は、その名で示されているように青年を対象とした聖書講座で、前教区長の溝部司教の提案で始められました。講師は司祭や修道者。単年度に3期あり、第1期は5月～6月、第2期は11月～12月、第3期は2月～3月で、各期ごとにテーマがあります。各期４～８週間、毎週９０分の講座が行われます。年間を通すと一つの会場で20回前後の講座が開かれていることになります。たとえば２００９年度は、高松四国カトリック会館、中島町教会、丸亀教会、坂出教会、徳島教会、道後教会、今治教会の６つの会場でそれぞれ20回の講座が開かれましたので、四国全体では1年間に１２０回もの講座が行われたことになります。

松山地区の青年を対象に道後教会を会場に『若者と聖書』が開かれるようになったのは２００７年からで、期間中は木曜日の午後7時から8時半に行われていました。今までに道後で開いた講座の回数を数えてみると90回にもなります。講師として来られた担当者を順に紹介しますと、佐藤神父、Br八木、溝部司教、フォンソ神父、ルイス神父、ハビエル神父、Sr佐々木、Sr山口、土屋神父、浜口末男神父（現大分司教）、サンティアゴ神父、ユ・ペドロ神父、イル神父、ロファンディ神父、氏家神父、川上神父、ファン神父、パウロ神父、諏訪司教と、何とも贅沢な講師陣ではありませんか。

参加状況はというと、松山・道後・郡中の３教会から、当初平均して７人くらい、最近は平均４人くらいで、延べ４５０人の青年が参加したことになります。その間には『若者と聖書』がきっかけとなって、教会に戻ってきた青年や洗礼を決意した青年もいます。

残念なことに２０１２年度の第1期に大学の授業やバイトの都合などで1人しか参加できない状況になり、２００７年の開始以来はじめて休止する事態となりました。そこで次の期には今までのような平日の夕方に何週間か続けて行っていた講座を、皆が集まりやすい日に、講話時間を延長して単日でできないかと考え、２０１２年度の第２期は諏訪司教にお願いして、通常４回分の内容を1回にして、12月９日（日）に『若者と聖書』を開いて頂きました。

青年の参加は10名でした。まず、自己紹介のために互いのペアの相手を次々に変えながら1対1で対話をした後、聖書や詩人のことばを読んで「わたしはだれ？」、「私の本質は何？」と考えを巡らせました。次にダイナミックメモリーによる自分の人生の振り返りをし、最後に青年たちは感謝の祈りを発表し、テゼの祈りで締めくくりました。

『若者と聖書』の後は、遅れてやってきた1名を加えて諏訪司教と一緒に鍋を囲んでのクリスマス会を開き、ワイワイと楽しい時間を過ごし、皆で新年会の約束をして終わりました。

私たち担当者はこれからも青年たちが集まりやすいように工夫しながら『若者と聖書』が続けられるようにしたいと思っています。興味のある青年は是非参加してください。また知り合いの青年に参加をすすめてください。

道後教会　竹葉純子

道後で「若者と聖書」とクリスマス

諏訪司教を迎え楽しいひととき

医療のともしび（37）
痛みとうまく付き合う方法

神経病性関節症という病気があり、この場合関節は痛みを感じないか 感じにくい状態です。そのため、その患者さんは通常より関節を使っても痛くないので、その分どんどん悪くなります。この例から言えることは、痛みとは過度の使用を控えるようにする自然の防衛力であるということです。その意味で痛みは、患部を安静にするようにしむける自然の営みと言えます。

そのため古来から、人間は痛いときは安静にすることでそれを乗り越えてきました。その後、医学の進歩で発痛機序（痛みのメカニズム）や発痛物質の存在がわかり、それに対し解熱鎮痛剤（いわゆる痛み止め）が使われるようになりました。

この痛みは侵害受容性疼痛と言います。わかりやすい例では、どこかに体をぶつけた時に痛いと感じるもので、そのあとの血腫などの炎症からでてくる痛みです。

また神経因性疼痛があります。上記の痛みが続いた後にでてくることが多く、痛みを感じる経路（末梢神経から中枢神経にかけて）の異常と言われています。従来抗うつ薬、 抗てんかん薬などが使われてきました。麻薬系の薬も使われます。最近 プレガバリン（リリカ）、トラマドールとアセトアミノフェン配合錠（トラムセット）、ブプレノルフィン（ノルスパンテープ）などの使用ができるようになり、この疼痛から解放される方もでてきています。

さらにペインクリニック科でブロック療法を行うことがあります。

心因性疼痛といって臨床的に痛みの病変がわからないが患者さんが痛いと訴えるものがあります。これは医師も把握できない痛みです。実際に臨床問題上やっかいで、精神科 心療内科受診をする場合が多いようです。

スピリチュアルペイン（死が間近に迫った患者の方が、生きる意味や価値を見失ったり、死後の不安や罪悪感などで苦しむ痛みのこと）からスピリチュアルケアが必要な人もおられます。この痛みは人間存在の実在的な痛みとも言われます。整形外科専門の立場からは 手術療法でよくなる場合もあります。

痛みを定量的に測定することはまだできません。血液検査で疼痛の大小がわかる時代になるといいと常々思っています。臨床的には患者さんの自覚症状と、医師の確認する圧痛点、腫脹、画像所見などから総合的に判断するしかないのが現状です。

上記を理解していただいて、今痛みが続いていても希望を失わずに担当医とよく相談して根気よく治療していくことが肝心です。一方で完全には痛みの機序が解明されているわけでないこと、痛みを測る検査がない状態を理解していただいて、今ある痛みを早くどうにかしてほしいと担当医に言っても、おのずと限界点があるということを患者さん側として理解していただく必要があると思います。この２つが痛みとうまくつきあうコツだと思います。

坂出聖マルチン病院 整形外科 田賀谷健一

教区スケジュール

3月
- 2日（土）（拡大）宣教司牧評議会in中島町（～３日）
- 3日（日）四旬節第３主日
- 6日（水）司祭評議会12:00
- 10日（日）四旬節第４主日　10：00 ヨゼフ神学生認定式
- 17日（日）四旬節第５主日
- 19日（火）聖ヨゼフ（祭）
- 20日（水）春分の日　宋神学生祭壇奉仕者選定式・召命の集い
- 24日（日）受難の主日（枝の主日）
- 27日（水）聖香油ミサ11：00
- 28日（木）聖木曜日
- 29日（金）聖金曜日
- 30日（土）聖土曜日
- 31日（日）主の復活

４月
- 7日（日）復活節第２主日（神のいつくしみの主日）
- 8日（月）神のお告げ（祭）
- 14日（日）復活節第３主日
- 18日（木）司祭評議会10:30・司祭集会13:00in北条カタリナ（～19日）
- 21日（日）復活節第４主日　世界召命祈願の日
- 28日（日）復活節第５主日
- 29日（月）昭和の日　聖カタリナおとめ教会博士（記）

告　知　板

高松教区召命促進委員会

―第２回「召命の集い」―

テーマ：「神様はみんなを呼んでいる」

期　日：13年3月20日（水）11:00～15:00
場　所：カトリック四国会館（カテドラル）
申込先：教区事務局 TEL（087）831-6659
　　「召命の集い係」
申込締切：3月10日
対　象：小3～中3・高校生＆青年
参加費：無料
時間割：10:30 受付開始　11:00 開会
　　15:00 宋神学生・祭壇奉仕者選任式ミサ（カテドラル）
　　16:00 ミサ後、解散
主な内容：召命の分かち合い
指　導
小学生・中学生の部：林神父
高校生・青年の部　：溝部司教

聖心の布教姉妹会　高知修道院閉鎖のお知らせ
これまでの共なる歩みに感謝

2月の寒い或る朝、聖堂の窓から外を覗くと固かった梅の蕾が丸くなって、白い花びらまでにほころび始めているのを見つけ、自然界の逞しさに驚き教えられる思いがしました。

私ども聖心の布教姉妹会　高知修道院は昭和15年4月に、当時の田中英吉司教様の招聘を受けて、修道院と共に「聖マリア園」を設立し、以来「マリア園」の愛称で、教会と地域の皆様に親しまれて参りました。

平成20年4月から児童福祉事業を新たな法人に引き継いで頂き、平成23年3月には学校法人の聖園幼稚園を閉鎖し、この度、高知修道院を引き揚げさせて頂くことに致しました。

本当に長い年月を江ノ口教会共同体の仲間として、多くの神父さま方、信徒の皆様にお世話になりましたことを心から御礼申し上げます。

これからも高松教区・各教会に連なる皆様と祈りに結ばれ、つながって参りたいと存じます。

皆様の上に神様の豊かな恵みをお祈り申し上げます。ありがとうございました。

聖心の布教姉妹会
高知修道院姉妹一同

神とのつながりを歩む
〈女性の視点から教会を考える委員会〉
松浦司教の講演や分かち合い

坂出教会

この大会は、高松教区内で、２００９年より溝部司教様のもと「女性の視点から教会を考える委員会」として発足、年１回４県持ち回りで開かれている。

今回、２０１３年１月12日（土）カトリック坂出教会で、『いのちをつなぐ女性と平和』をテーマに松浦悟郎司教の講演で会は始まった。

参加者は、司教２名・司祭２名・助祭１名・香川より50名・愛媛より47名・徳島13名・高知６名の計１２１名で、男性も幼児も参加していただいた。

以下は講話から導き出されたものです。

『命をつなぐこと』が平和そのものであり、神様とつながって行く歩みなのか、分断されたものかが分かれ目となる。

社会でも教会でも同じく、神と人につながってゆく歩みが神の国の完成となっていく。

『らしく』とは、神の被造物である人間の普遍性を生きること。神が人間をどう創ったかを考え、私の生き方の中で、神から与えられた尊厳を輝かせていくことが大切なことである。

『聖書』を背景として、貴方と私は神から愛されたかけがえのないたった一人の存在であること。貴方と私がつながり溢れていくとき、いのちが開かれ、それが神の似姿となる。

相互だけの愛は閉じた愛であり壁をつくる。『平和への使命』とは体験した善を、日常の中で生かし、人々につなげてゆくこと。

午後は13グループに分かれて心を開き、溢れる思いを分かちあった。

ありのままの私を感謝し、たった一人のかけがえのない存在として希望を携えて生きること。

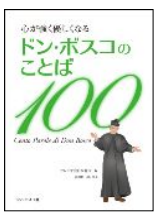
全てに時があり、社会でも教会でも、組織としての問題を謙虚に受け止め、善処していこうとの発議があった。

大会に参加できたことを感謝し、心に残った内容を少しでもお伝えできれば幸いです。

愛媛地区　関ちず

新　刊　書　籍　紹　介

■心が強く優しくなる
『ドン・ボスコのことば100』



ドン・ボスコは子どもたちを愛し育てることを大切にした。彼のことばには、寄り添い、人を笑顔にし、導いてくれる力がある。苦しい時、勇気づけてほしい時、道しるべが必要な時に支えとなることば集です。

■編者　サレジオ会日本管区

1859年、ドン・ボスコにより創立。青少年、特に貧しく不利な立場にいる青少年のために生涯をささげて働く修道会。現在、1万6千人の会員が世界130 か国以上で活動している。日本には13支部があり、青少年のため教育・社会福祉・出版・教会活動に携わる。

文庫判　205頁　定価（本体500円＋税）
監修　浦田慎二郎　発行：ドン・ボスコ社

■『聖性への招き』　ふつうのおばさん、おじさんも聖人に

第2バチカン公会議のメッセージ「教会における聖性への普遍的召命」をわかりやすく解説。

1 聖ホセマリア・エスクリバーによる“キリスト者の生き方”の基本原理。
2 聖性への普遍的召命に関する教え（聖性と使徒職への普遍的召命、教会における召命の唯一性と多様性。
3 家庭における信徒の聖性を実践した人たちの姿
・少女アレクシアとその母トマス・アルビラとパキータ・ドミンゲス夫妻
4 これからの歩みの助けとして
　―祈り（念祷）の仕方―

著者：酒井俊弘　判型：A5判並製
110頁　発行：教友社　定価：1050円

編集後記

四旬節に入った矢先、歴史上６００年ぶりとなるローマ教皇引退という思いもしないニュースが飛び込んできました。誰もが寝耳に水と、その驚きを隠せない事態だ。全世界のカトリック信者に自らの信仰の振り返りと刷新を提言し、共に歩もうとされていた中での引退劇でした。

私たちの教会は誰が教皇になられても教皇ベネディクト16世が指示された同じ方向へ向かって歩むことになるでしょうね。（J）

聖ドミニコ宣教修道女会

医療法人社団聖心会　阪本病院
わたしたちは、患者様の立場に立った全人医療を行い、地域の皆様に愛され信頼される病院を目指します
院内保育園完備

整形外科・脳神経外科・泌尿器科
皮膚科・外科・消化器外科
肛門外科・乳腺外科・形成外科
呼吸器外科・呼吸器内科・内科
リウマチ科・放射線科・リハビリテーション科・麻酔科
〒769-2602
香川県東かがわ市川東103-1
☎0879-25-1121（代）
http://www.idm-hcg.co.jp/sakamoto/

私たちは、自分を創造しようとするこどもを
暁　の　星　学　園

鳴門聖母幼稚園　高知聖母幼稚園
阿南聖母幼稚園　海の星幼稚園